
第3章 消防機械装備の近代化

● 消防機械装備・設備等の近代化

わが国に初めて消防ポンプ自動車を紹介されたのは、大正3年（1914）東京・上野で開催された「大正博覧会」であった。この博覧会では、初めて消防ポンプ自動車が出品されたばかりでなく、数々の新しい機械が紹介され、日本の工業力発展に大きく貢献し、消防の機械化にとってはまさに画期的な博覧会であった。

大正15年、入間川消防組は消防機械器具として、自動車唧筒1台、オートバイ唧筒1台、ガソリン唧筒1台、腕用唧筒2台、龍吐水1台、雲龍水1台を消防機械器具として所有していた。

昭和初期からの消防機械化の発展により、消防自動車の普及も進み、昭和4年には、グラハムブラザーズロータリー式唧筒付自動車、フォードエンジン使用ポンプタービン式消防用ガソリン唧筒を購入し、消防機械化を推進、当時、自動車ポンプ1台、ガソリンポンプ2台、腕用ポンプ4台を所有していた。

また、昭和7年頃には、自動車ポンプ2台、手挽ガソリンポンプ2台を所有し、ガソリン唧筒等機関操縦の取扱いについても組員が昼夜操作訓練に励み、規律も今までよりはるかに進歩した。このため火事に出動して活躍する消防組の消防力も強化され、住民の信頼も高まり、消防史に新しい時代が到来した。

自治体消防時代に入り、昭和24年4月22日、国家消防庁長官名で最初の消防力の基準である「常備消防力の設置基準について」が

告示され、消防力の充実に對する整備目標が示された。

当時、入間川町消防団には、消防ポンプ自動車2台が配備されていたが、昭和26年6月6日、入間郡柏原村での火災応援出動の際、第3分団配備のシボレー（1931年式）消防ポンプ車が故障となったため、急遽、7月9日、消防第106号で東京都消防庁消防総監あてに、ポンプ自動車の払下げ車両の寄贈申請を行った。

早々、東京消防庁総務部から返答があり、昭和26年11月1日、トヨタ（1941年式）ポンプは市原ポンプ2段タービンの自動車ポンプが譲渡されることとなった。

また、昭和27年6月5日・12月10日にも同様な払下げ申請を行い、10月にトヨタ（1942年式）市原ポンプ二段タービンの消防自動車を28年8月には、東京消防庁渋谷消防署に配置されていた、トヨタ（1942年式）市原ポンプ二段タービンの消防自動車を払下げにより配備した。

これにより入間川町消防団全分団に消防ポンプ自動車が配備された。当時、消防自動車を配置するときには、入魂式という儀式が行われ多くの来賓・関係者が参列し執り行なわれていた。

昭和28年には、「消防施設強化促進法」が交付され、消防の用に供する機械器具及び施設に国庫補助が認められるようになり、国においても整備充実強化の推進を図った。

昭和 30 年代に入り、わが国もようやく戦後の混乱期から脱し、各種産業も軌道に乗りはじめ、社会環境は次第に整備されてきた。

昭和 30 年 9 月 12 日、第 4 分団、第 5 分団に新装の消防車（ニッサンジープ・市原ポンプ当時の金額 158 万円）が配備されると全管内の消防車が機械化されることとなった。

しかし、当時は運転免許を持っている者は少なく消防車が配車されても操縦できる団員もいなかったため、操縦手の養成が第一の課題であった。

そのため、急遽、両分団から 4 名を選抜し、小学校の校庭を拝借して 7 月中旬から 9 月上旬まで約 60 日間、酷暑の中を一日も休まず、前進、後退から始め直角通過、S 型、連続直角から鋭角等、校庭に線を引いて猛訓練を重ねた。

その頃、川越刑務所に大宮の運転免許試験所と同じコースがあることを知り、そこを借りて最後の仕上げをして大宮での試験に挑むなど、当時の操縦手の育成にも苦労が覗えた。

昭和 39 年の東京オリンピック以降、日本は高度経済成長期に突入し、生活様式も高度化・複雑化へとなり社会環境が著しく変化していった。

狭山市は、それまで農業が主な産業であったが、新狭山、柏原地区に工業団地が造成され、企業の工場建設が急ピッチで進み、工業分野の活性化により、田園都市から工業都市へと発展を遂げた。

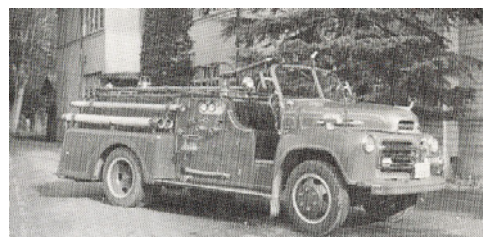
また、一般家庭においてもプロパンガス、石油等の使用が増大すると共に、自動車の需

要も増加し、災害事象もビル火災、危険物火災、大規模災害など多種多様と化した。

消防団も、こうした事態に対応するため、消防防災の拠点となる消防詰所の整備、また、消防活動の迅速化を図り、消防ポンプ自動車、小型動力ポンプ積載車の配置を進め機動化・、消防活動の迅速化を逐次進め、現在は広範な消防事象にも対処できる消防力を持つまでに発展した。



ウイリスジープ消防車 1995 年式



ニッサン FS580 型消防車 1996 年式

昭和 30 年当時の消防施設状況

昭和 30 年 6 月

施設別 分団別	消 防 自 動 車	可 搬 式 消 防 ポ ンプ	腕 用 ポ ンプ	火の見櫓		貯水槽（単位：石）					
				鉄骨	木柱	50 以下	50 ～ 100	100 ～ 200	200 ～ 300	300 ～ 400	400 以上
第 1 分団	2			3	2	23	11	3	3		
第 2 分団	2			2	1	15	6	4	2	1	
第 3 分団	2		3	1	6	54		7			2
第 4 分団		7		2	6	206	3				
第 5 分団		3	4	4		4					
第 6 分団	1		2		5						
第 7 分団	1	2	4	2	2	11	2				
計	8	12	13	14	22	313	22	14	5	1	2